

## 第3回 阪神新地域ビジョン検討委員会 議事録概要

- 1 日 時：令和3年3月24日（水） 10時～12時
- 2 場 所：宝塚商工会議所（宝塚市栄町2丁目1番2号）6階 多目的ホール
- 3 出席者  
委 員：赤澤委員、佐久間委員、松元委員、川中委員、近藤委員、  
定藤委員、谷口委員、水野委員、山中委員  
行政委員：橋本委員、堀越委員、大上委員、伊藤委員、的場委員、太田委員

### 4 内 容

- (1) 開会 坂本阪神北県民局長あいさつ
- (2) 未来ミーティングからの最終報告
- (3) 阪神新地域ビジョンの骨子案策定に向けた意見交換（概要は以下のとおり）

#### 【坂本阪神北県民局長】

3回目の検討委員会で、骨子案のたたき台をお示しし、皆さんに議論いただくとともに、前回、未来ミーティングの若い人から中間提言をいただいたが、この阪神新地域ビジョンをどう考えたらいいのか最終報告をしていただくことになっている。これもどんどん反映させていきたいと思っている。

今日の神戸新聞に住みたい街ランキングが載っていた。西宮が9年連続で1位、阪神北地域は伸び悩みとあるが、暫定的に人気があった。やはり住みたい街としては、高い評価である一方で、先日発表された住民基本台帳の人口移動でみると、阪神間は20代前半が転出している。20代前半でプラスになっているのは尼崎市だけであるが、地域的に見ると問題ない。詳細を分析しないといけませんが、20代が動いているということが強く出ている。30代、40代の子供を連れたファミリー層にとってはいい街だとしても、20代が面白いと思って、楽しみでやってくる大阪や東京のようなエリアになりきれていないように思う。そういった若者定義も含めて、若い人たちにとって面白いことができる未来像を考えられたらと思う。そのために、骨子案で、特に第4章以降どんな未来像を描くか、その中心になるのは何か。その姿を実現していくのに一番象徴となるようなシナリオはどんなのがいいだろうかというご意見をいただけたらと思うので、よろしく願います。

#### 【事務局】

未来ミーティングの提言について、ご説明する。阪神地域に現在関わりがある、または関わりがあった人で、次世代を担い、時代をつくる20代から40代の若者を中心とする会議である未来ミーティングでは、普段感じている地域の問題点、課題、今後望む生き方、地域の将来像について、「保育・教育」、「多様な働き方」、「地域のつながり・コミュニティ」、「若い世代の定住定着・呼び込み」の4つのグループに分かれ、全5回にわたり議論していただ

いた。本日は各グループから最終提言を行う。

#### 未来ミーティングからの最終報告①「保育・教育」

「保育・教育」のグループは教育、保育関係の現場で働いている者、そういう現場に携わっていないが関心がある者の5人のメンバーで構成されている。

「保育・教育」という観点で現代社会を見ていくと、マンションの隣が誰なのか分からない、共働きである、子供の習い事が過多になっている、コミュニケーションが低下しているところで、地域社会の断絶のようなものがある点を問題とした。2050年に向けて阪神地域で若者が定住していくには、「おせっかいがおせっかいでない地域」を実現させたら住みやすい地域になるのではないかと考え、最終提言では地域の養育力を向上させていくための解決策を考えた。

30年後の2050年には、技術が発展し、「バーチャル空間を駆使した‘第2の家庭’づくり」という案があった。ネット上でコミュニティを作るツールは今もあって、例えば、この阪神地域に関わりのある者、住んでいる者限定のツールを作り、バーチャルの中で家族と違う者をつながりを持つ手段があれば、家族に打ち明けられない相談などを打ち明け、高校生や大学生が将来の進路について大人が道筋を立ててあげることができるのかもしれない。そういう意味でつながりをつくれるかもしれないと考えた。

またAIを活用し、相談と回答を行う、地域を活性化するツールも提案したい。

今からでもできることや既にやっていることでは、ひとつは、同地区内のつながりを構築するために回覧版を充実させること。また地域のキャンプやバーベキューを行い、地域の子供と地域の大人が触れ合う機会を作る。少子高齢化で高齢の方が増えていく中でシルバー人材の活用という意味で登下校の挨拶や見守りパトロールで子供たちの安心をつくることもできるし、それを見せることによって、この地域で子育てするには安心な地域だと若者にもたらす効果もある。それがうまく働けばこの地域に住む。仕事でたまたま来たからここで住むのではなく、子が成人するまでこの地域で住もうと定住化も図れるのではないか。地域の養育力を向上させることで、「おせっかいがおせっかいでない地域」になると思っている。

#### 未来ミーティングからの最終報告②「多様な働き方」

多様な働き方は、「理想のキャリアが実現できる」とことと定義している。最初にインタビューをして、多様な働き方の定義は何か、あるいは、多様な働き方を実現するために課題は何かというような事を聞いている。その結果、WEB業界は阪神地域に仕事が多く、案件単価も高く、関西に仕事が少ないという内容や自己実現ができる働き方が少ない、できない、製造など仕事や場所に依存した働き方はリモートワークがしにくい、あるいはダブルワークができない。そして会社の体質が旧体質でライフスタイルに合わせた働き方ができない、残業が多い、有給がとりづらいというような問題が出されている。もう一つの視点として、学生のとくに企業に求めている条件が、実際に社会に出てから、他にもこういうことがあればいいなということに多く気づいたということも挙げられている。需要と供給をマッチさせることが、多様な働き方に繋がるのではないかと考えている。ここまでが主な中間報告の内容

になる。

今回、「ガイドラインをつくる」ことが一番の提言である。そのために、共通言語としてのフレームワーク、例えば企業や行政が仕事内容や給料などを開示しているが、これに加えて、地域で企業や行政の雇用者が共通して使える9つの達成基準を定義したガイドラインを作成し、多くの企業や行政など雇用する側が導入して、働きたい人がそれを見ればわかる仕組みを浸透させることが重要ではないか。これは、2050年に阪神地域がどのようなようになっていけばいいかという将来像にもつながり、ガイドラインに組み入れることで仕組みとするようなやり方である。①リモートワークができる環境を推進する、②ダブルワークができる、③残業を少なくする、④成長が実感できる環境がある、⑤働きやすい雰囲気をつくっている、⑥キャリアを実現するための教育がある、⑦休みがとりやすい環境がある、⑧理念やビジョンを発信している、⑨変化に対して柔軟な働き方ができるという将来像を挙げ、実際に社会の中で働く人が体感したことを踏まえることが重要ではないかと考えている。

今後の課題は、地域の中で特性を出しながら使っていくことになるが、阪神地域ビジョンで活用していただきたい。

### 未来ミーティングからの最終報告③「地域のつながり・コミュニティ」

「地域のつながり・コミュニティ」のメンバーは5人。メンバーの意見として、「若者が気軽に参加できるコミュニティがない様に思う」「既存のコミュニティに飛び入りで入るのは少し怖い」「コミュニティという言葉にピンとこない」「繋がりは希薄になっているように感じる」「フットワークが軽い時なら探すのは容易だが、子どもができたりに途端大変になる」「地域の人たちとつながる機会がない」「独居老人や認知症の方の話を聞くと地域のつながりが薄いと本当は大変なのではないかと思う」などの意見があった。ここからコミュニティの課題として3つ挙げた。①単身者の増加でどのような繋がりを作るか。結婚しなくても事実婚や養子の考え方がフランクになり、家族のような関係性を築ける。近未来的な話になるが、介護や育児対応のロボットが活躍し、育児・介護の負担が軽減される。外国人とのコミュニケーションを強化するために翻訳機やポケトーク等の普及、オンライン上でつながるバーチャル化のような繋がりを作るのはどうか。②コミュニティへの興味をいかに高めるか。製造業が盛んで、神戸や大阪への交通が便利でインフラが整っている。甲子園球場でのプロ野球、高校野球や、宝塚歌劇など日本を代表するエンターテイメントが充実している。阪神間には大学が集中していることから、「誰もが気軽に立ち寄れる‘行き交うまち’づくり」「趣味嗜好の合うもの同士で分かちあう‘出会うまち’づくり」「各大学同士・地域が連携し‘帰るまち’づくり」によって興味を高めるのはどうか。③手軽に・身近に参加できるツールを作る。コミュニティを形成する「ツール」として「マッチングアプリ」により、仕事で忙しくて保育園に迎えに行けない親と子どもと関わりたい人とのマッチング、さらにグループを作成したり、数日家族としてシェアハウスで生活する家族的コミュニティなどが考えられる。そして人と人が繋がるまちである「シェアタウン」としてコミュニティを形成する場を作るのはどうか。例えば、年齢、性別、志向でつながるまちが考えられる。阪神タイガースファンしか住めない〇〇番地、地域内で結婚したら住居をプレゼントや、年齢性別

の違う人同士でのシェアハウスなど、2050年に向けてステップアップしてはどうかとの意見がでた。

#### 未来ミーティングからの最終報告④「若い世代の定住・呼び込み」

本グループは5名。本日の発表は、「1 背景」から「2 現状の深掘り」「3 提言方針」、最後に「4 将来像の提言」のステップで報告する。

背景は、高齢者が増えて若者が減ってくることに對して、どうにか若者を定住させられないかというところから検討を進めた。ポイントは地縁のない夫婦が阪神間で生活や子育てをしようとした時に不安があるという声が上がっている。既存のコミュニティに入りづらい若い世代は、知り合いがいけないという状況で何とかしなければならない。阪神地域の中で交通網が不便でバスの本数が少ない場所に住もうとすると、車を所持していない、買うお金がない時点で転入の選択肢から外れてしまう。働きやすさという目で見ても、阪神間の求人は少なく、大阪や神戸で働かざるを得ないため、阪神間が自然と選択肢から外れる。住むのにとっても人気がある街であるがゆえに、こういう苦情が見つからず子供を預けて仕事に専念できないという声が上がっていた。それに対する提言方針は、子育てや介護で若者同士がつながれるような地域の共助網を構築すること、1人1台の車が前提となった社会ではなく、最新技術やシェアリングエコノミーを使って交通過疎の地域にも移動手段を与えてあげること、求人情報が目に入るように地域で求人情報を集約すること、阪神地域の企業間で人材交流を盛んにするということ、最後に、最新技術を積極的に取り入れた保育効率化のモデル都市として全国を牽引できるようになって欲しいということである。

阪神北地域の将来像と課題について説明する。特に山間部では都市と違って既存コミュニティに入れるかが生活の要になっているが、年齢差などが理由で入りづらい。また、鉄道沿線では一見ニュータウンとして名塩や川西のような地域でも、今後オールドニュータウン化が進んでいけば交通インフラの崩壊に直面するかもしれない。

若者を呼び込み地域を活性化させるために何ができるかを検討して3つ挙げる。①休日に若者が帰ってくるまち、②ニュータウンに安くて初期投資なしで住めるようにする、③過疎の地域では必須の共助という負荷を分散させること。具体的な実現イメージとしては古民家のコテージ化や民泊だとその地域に毎週来なくても都会に住んでいる人に特産品などのおすそ分け文化で常に阪神北地域を意識してもらえる。2つ目はオールドニュータウン化が進んで転出者が出るのであればそういった住宅を、例えば行政が少し踏み込んで、借り上げて固定資産税なども優遇してあげた上で、若い世代に貸してあげること、安くて広いという都会では体験できない居住体験ができる。3つ目は、共助というのは今までだと顔見知り为主になっていると思うが、ITでのマッチングをするという方法が考えられる。

知らない人にも気軽に助けを頼める、助けられるというために、ある程度の報酬を地域から出すという方法が考えられる。

次に阪神南地域。阪神南地域の課題と言え、まずは①子供を預けられない頼れる人がいない、②仕事といえば大阪神戸方面に出る。最後に、実は阪神南地域でも③人口減少高齢化が進んでいるという3点である。

コンセプトは①住みやすさがピカイチ、あらゆる世代が住みやすいまち、②続いて働く人を応援してスキルを伸ばせるまち。③三つ目が新しい観光が広がって、他の地域から活気が読み込まれるまちになる。

コンセプトの住みやすさがピカイチということは、お金を持ってない若者でも交通手段に困らないという点、働く人の応援ということであれば、副業という目線であれば特に仕事に困らないという点である。

観光については、VR といった、主にゲームに用いられている技術を観光目線にも取り入れることで、酒蔵や甲子園といった観光資源に他地域にいる人が訪れてくれる、もしくは訪れた人がより拡張的な体験をできるようになるということである。具体的に若者同士が繋がる地域の共助網というのがどういうものなのか、説明する。

今の課題は若者が孤立しているということと既存コミュニティが高齢化しているということである。

これに対して 2030 年か 2040 年には、ボランティア同士をマッチングしてあげるということで、共助の活性化をする。全員に頼り切るのではなくある程度報酬を出すことで、お互い頼みやすくなる、地域に若者が不可欠になるということと助け合いが活性化するというところ二つをねらっていく。最終的には、地域に若者が触れ、子育てを楽しみつつ地域でつながる高齢者もマッチングされる、必要なときに助けをもらえる、そういった社会を目指していきたいと考えている。

次に交通過疎の解消である。

先ほど申し上げたように現在、鉄道沿線以外では、車がないと移動できないような公共交通の空白地帯や撤退していく地帯が目立ってきている。

自家用車がある人は移動でき、自家用車がない人は移動できないということで、移動の機会が不平等になってしまっているというところは課題として挙げられる。

三つのコンセプトとしては、まずは世代地域を問わず簡単に移動できるという点。あと安く移動できるということで、最後は安全エコであるということである。

実現イメージとしては、今後自動運転は、2050 年であれば普及しているものと思うのでポタン一つで自動運転車が迎えに来るようになっていられると思われる。ここのコストを誰が負担するかというと、個人でも、行政でもなく、今の自治会の会費のようなもので地域住民同士が固定費を出し合って、また貨物と客を混載するようなアイデアも使い、何とか安くする。また、安全なエコ技術の活用であるが、水素、電気自動車のような先進的な整備について補助を出せば、促進されるものと思う。

三つのポイントとしては、地域軸の求人地域なり働きたい実現するという点と、教育機関とのシナジー効果、最後に地域内の企業同士で企業が高め合うということである。一つが求人情報の強化という施策で、二つ目が教育機関を中心に、セカンドキャリアの醸成に向けて教育機関で2度目の教育を受けられる環境の強化、三つ目がジョブ型雇用とかの副業推進に備えて商工会議所などが中心となって人材マッチングをしてあげること。

最後に保育の効率化について、保育士さんの間接業務が業務の負担に繋がっているという声もあったので、保育士さんの業務負担を IT で軽減するような仕組みづくりについては、

地域で推進していくということと、地域の方も保育需要に対応できるのではなく、いざというときに安心して子供を預けられるような地域社会をつくっていくことで、最終的には地域のみんなが当事者意識を持って子育てできる社会を作っていけたらということになる。

#### 【委員】

共通することとして、「阪神地域らしさ」や、「その人らしさ」を出すためには、全て平等に皆が「これをする」という社会ではなく、その人が出来なければ他の人が、他の人が出来なければ社会が支えるような新しい仕組みが必要になる。その上で IT などの新しいツールを作り、それぞれのコミュニティを作っていく。根底にある提言がそろったと思う。

今日の前半は全体の骨子案について、後半は骨子案に含まれる実現に向けたシナリオの構成について議論していく。

#### 【委員】

質問やご意見をいただきたい。

第2章（1）人口減少・超高齢化の②2050年に向けての項目で、「ゆとりのある暮らしが実現できる」とあるが、新しい人口の流動も始まる。特に若い人の流動や外国人が日本に来て新しい生活を始める機会が増え、ずっと同じ場所で住むことが少なくなっていくだろう。そこに新しいコミュニティを作るチャンスがあるのではないかと。人と人、コミュニティまでつなげようというのが、未来ミーティングの提言の中で強かった。（3）テクノロジーの進化に記載してもいいと思う。コ・クリエイトのまちに関して、製造業がものを作って対価を得る価値がお金に変わることも記載した方が、多彩な産業になるかもしれない。

#### 【委員】

会社を経営している者の視点に絞って話すが、未来ミーティングの内容も非常によかった。「リモートワークができる」、「ダブルワークができる」、「残業を少なくする」、「成長ができる」など、我々も取り組んでいる。しかし、淡路島にパソナが来て、淡路島の経営者等に何が変わったかを聞いた時に、「パソナに従業員が異動した」との話があった。それは給与面もそうであるが、経営者自身が「働かせてやっている」という気持ちがあり、会社を経営している者やマネジメントしているリーダー自身を変えないと変わらないと思っている。第2章（5）経済構造の変容のところは、2050年までに、どこでも仕事ができるようになることは当然だと思っているが、その反面、神戸や大阪にも近いと言っている。要するに、どこでも仕事ができるから阪神間に住もうと言いながら、大阪や神戸に近いということがメリットであるということが、矛盾している。経済の中心が神戸や大阪であり、我々が目指している社会が、阪神北地域、阪神南地域に住みながら、どこでも仕事ができる状況にしようと言っていることが、乖離していると思う。阪神北地域、阪神南地域の2050年を考えた時、ポイントは起業であり、どの立場で阪神地域をとらえるかによると思う。ここにビルを沢山建てるような地域にすることではないと思っている。起業というスタンスで考えた時にスタートアップがしやすい環境、つまり地価が安く、面白い人が沢山いて、そこに行政を含め住む

人々がいろいろな支援をして育ちやすい環境にあること、これは起業だけではなく、スタートアップのベンチャー型事業承継についても同じことで、そのような位置付けをして、神戸や大阪、東京に移っていくための起業しやすい巣のような状況と割り切ってもいいのではないか。そういう意味で、起業しやすい。自分らしく働きやすいというような機運を醸成していくことが重要だと考えている。また、「デザイン経営」というものを経済産業省とやっているが、言葉自体が浸透していないと経済産業省は言っている。しかし、スタートアップの中では当たり前「デザイン経営」をしている。新しい価値観の中で起業するということはそれだけ重要であると思っている。

#### 【委員】

重要な意見だと思う。マンハッタンなど安い地価で新しい人が起業し、それが集約してアートの街や新しいブランドの街に変わっていくことが自然に起きていく。阪神間のいろいろな歴史、文化の価値という土台の上に新しい企業ができて、初期投資が安いメリット以外で「ここで起業すること」が重ねられるかもしれないと思った。もしかしたらいくつかのシナリオを組み合わせたら実現するという構図になるかもしれない。

#### 【委員】

第4章（1）新阪神ビジョンの基本理念で、「住んでよし、働いてよし、集ってよし」は非常にいいと思っているが、P7（視点）「集ってよし」の文章に違和感がある。コミュニティの入り方や、企業と人をつなぐということ、疑似家族、オンライン上で相談相手をつくるような意味でのつながり、つなぐというような視点が未来ミーティングの発表で沢山あった。これだけを読むと、「何かイベントやります」という感じに見え、文化資源を利用してアートイベントを開催していくことで人をつないでいくこともあっていいが、もう少し踏み込んで人と人をつなぐ、つながっていく、それが「集っていく」の表現にしてほしいと思う。この文章で、他の意図があれば教えてほしい。

#### 【事務局】

「集ってよし」では集まってイベントをすることを主に検討させていただいたもので、人と人をつなぐという視点は抜けていた。参考にさせていただきたい。

#### 【委員】

「阪神らしい」を生かしたためニュアンスが強くなった。そこでの「らしい」がコミュニティを意図していると思う。全体的に「住んでよし、働いてよし、集ってよし」全部に関して、基本理念であるコ・クリエーションを実現するためには、どんな「住んでよし」なのかを書くイメージである。コ・クリエーションの「住んでよし」とは何か。寝て起きて働きに行くだけの「住んでよし」ではない気がする。今日の一つの論点である。

#### 【委員】

第4章(2)②、資料3⑪の文化芸術では、阪神間モダニズムという言葉が強調されている。阪神間モダニズムという言葉が意味する近代においては、住む場所と働く場所を「分ける」ことが明治維新以降にクローズアップされ、それが先進的に進んだ地域が阪神間であった。職住分離を特徴とする阪神間モダニズムに特化するあまり、職住一体など他のイメージと合わなくなってきた。阪神間モダニズムを使うべきではないということでない。もう少し前の時代からの事例を入れた方がいいのではないか。例えば伊丹の酒蔵や灘五郷とかその辺りはまさに職住一体であり、丹波とか篠山からの出稼ぎ交流があり、伊丹で清酒が江戸に下るといって日本全体をとおした商業圏の確立ということも含まれている。阪神間モダニズムに注目すると非常に意味があると思うが、これだけの言葉だと誤解が生じるのではないかと思う。言葉を深みのある表現にした方がいいのではないかなと思う。

#### 【委員】

第3章以前に今いいものとして阪神間モダニズムも含めたいろんなものをまとめている。第4章以降はそれを使ってどうするのか。コ・クリエーションに特化して書き分けが必要という意見だった。

#### 【委員】

「住んでよし、働いてよし、集まってよし」の続きになるが、ワークショップとかを実践しているのでネーミングが大事だと考えている。皆さんがお伝えしたいことは良い悪いの「よし」ではなくて、住んでいる人が心地よさを実感できる街というのを目指していると思っている。ただ、「よし」という言葉は善悪の判断基準を含んでいる言葉なので、少し見直すと伝えたいことがすっきりするのではないか。「コ・クリエーション」という言葉がとても興味深いと思った。個々人の創造と、個々がつながって共同創造していく。個々が住んでいる人なのか、行政なのかいろんな個々があると思うので、個というものを見直して共同創造できるかというようなイメージとして、コ・クリエーションというところを謳っていくと、このビジョンそのものが生きていくのではないかと感じた。

住む、働く、遊ぶ、をコンパクトな範囲で融合させていくのが阪神らしさではないかという話もあったが、第4章(2)新阪神ビジョン実現に向けた方向性の中で、1項目増やしてほしいことが、「教育」ではないかなと感じている。次の未来を担う子供たちをどのように育てていきたいかがこの施策の中で、取り入れられたらいいと思った。第4章(2)②自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまちにも関連するが、阪神間の魅力は、自然の豊かなところで、環境と芸術と歴史が密接に関わっていけることに文化的な芸術性を感じている。県立有馬富士公園でコミュニケーターという役割をしているが、子供たちの環境体験、自然体験を豊かにしていくこと、もう少し土地のことを知り、芸術的な側面も融合させていくと子供だけでなく関わる人達の文化意識も高まっていくと感じているので、このような視点を取り入れてほしいと思う。

## 【委員】

「よし」は「三方よし」を文字っている。ニュアンス的に社会的にどんな価値観を持った方も「やりやすい」というのも重要な視点かと思うので検討いただきたい。第2章(6) 価値観と行動の変化でしっかり記載する。今の潮流を書いているが、根本的な考え方で倫理的とか社会正義の考え方、個性の発言がどうにかなることもしっかり書いてもいいと思う。教育のことに関しては4章(2)にプラスする意見だったが検討する。一方的に教えるというニュアンスも過去の経緯であって、学習で学びあうなど、おそらく大人から子供以外のニュアンスも入るのではないか。旧住民から新住民、おじいちゃんおばあちゃんから全く関係のない子供たちなどいろんな学び合いの享受の一つだと思う。幅広く表現してもよいかと思う。

## 【委員】

2章(1)～(6)で、「①現状・問題点」と「②2050年に向けて」は対応関係を意識して書いていると思うが、「(5)の経済構造の変容」だけは、「①現状・問題点」で指摘されたところと、「②2050年に向けて」が一致していないところがあるので加筆すべきだと思う。具体的には、「①現状・問題点」の「新自由主義や株主資本主義を台頭の」という文章に対応する内容が、「②2050年に向けて」では、見られないと思う。ここの部分に対応するのは、協同労働やコミュニティ・ビジネス、ソーシャル・ビジネスなどによる社会的連帯経済が活性化する事業に関する内容であろう。こうした事業の支援やスタートアップをどのように進めるかといった「働く」に関わる動きをどう作り直していくのかを考えなければならない。

第4章(1)は「三方よし」に引きずられているように感じる。阪神間は教育機関が充実していると記載があるが、「学ぶ」というところは何を指向しているのか見えにくい。また、「働く・学ぶ・集う」の内容を読んでいると、どれも生真面目で「大変」だなという印象を受ける。「遊ぶ」や「余暇」に目を向けた内容も考えたほうがいい。そうした表現が前に出ないと「肩が凝る」ようなビジョンになる。(2)では第2～3章との対応関係みると、環境問題への対応が消えている。地球環境問題への緩和策・適応策をどう進めていくのか、あるいは防災／減災の取り組みをするのが見えにくくなっている。

P.8では、何でも行政が担う時代ではないことが前提となっているが、そうであれば、逆に行政は何を保障するのが見える必要がある。地域住民が担うべきことが増えるにあたって、行政が担うべきことは何かという価値判断のものさしが、大きなビジョンで示されるべきである。また、アートイベントについて触れられているが、日常的な実践こそが、人と人とのつながりが生み出されていくきっかけになる。イベントも、それは一体感の醸成にもならない。その場の盛り上がりでしかない。この部分の記述だけ具体的なので余計に気になる。

## 【委員】

具体的な提言をありがとうございます。P8の行政の役割で一般的に言われるのは、事業は共同で色々な方とコラボレーションしてやることに移行し、残るのは共通目的とするビジョンを掲げる、ポリシーを掲げることと、それをやりやすくする支援と分かりやすいガイドライン、「できる」、「できない」の判断を行政がするのではなく、最初から「これでいく」

とどこまで出せるか、お互いにやりたいことを許容しながら進めていくためのルールを作ることで、海外でよく言われている。第1～3章を踏まえて4章の基本理念の知見がどう組み合わせられて、価値や新しいコ・クリエイティブが乗っかって、次の10年後、50年後にいくのかということ、見てわかるような形で最終的にまとめるといいと思う。

#### 【委員】

第2章(3)テクノロジーの進化でAIやIoTの発展によって移動や言語的なコミュニケーション、働き方が変わり、延長上に生活のスタイルが変わっていき、変化が大きく影響を受けることがとらえられている必要があると思う。文言については「②2050年に向けて」の「ベッドタウンの特性にも影響を与える可能性がある」という文章は阪神地域に特化した内容だと思うので、第3章の阪神地域の特性に記載したほうがいいと感じた。第3章(2)なりたち、自然・文化・歴史遺産の後半でこれからを考えるとときに大事なのが大学や短期大学などの教育機関の集積で、阪神地域ならではの大きな可能性があると思う。これが、企業連携や地域連携、行政連携など、今後の時代を開くかぎになると思うので、この教育機関の集積と若者の存在をもっと強調してはどうかと感じた。第4章(視点)「集ってよし」を全体的なバランスで考えると、例えば、「文化資源を利用したコミュニティ活動を創出し」など、もっと大きな言葉の方が、幅広い活動に展開できると思う。全体の基本理念の「コ・クリエーションなまちの実現」については、内容的には私はとても大賛成で、この大きなこのシナリオの流れとしても非常によいテーマだと思う。ただ、第1～3章の内容が、どうしてコ・クリエーションというテーマになったのか、その背景や理由が明解に論じられるといいと思う。やはり、少子高齢化、様々な災害、子育て、外国人との共生、ひきこもりなどの弱者への対策を考えたときに、これからますます課題になっていくのが、実はコミュニティをどう重層的に人と人とのつながりを創るかが大変大きな課題になるだろう。それを考えたときにその対策として、私たちが共有しなければいけないのが、このコ・クリエーションという、一緒につくるというまちづくりではないか。そのような議論の中から、この理念が出てきたのだと思うので、それを文章として入れるとよいのではないかと。

#### 【委員】

骨子案の構成はどうか。バージョンアップした案になると考えてよいか。

#### 【委員】

人々のどういう願いや望みが根底にあるのかが見えた方がいいと思う。0章または第4章の手前かもしれないが、これまでの未来ミーティングやアンケートなどで聴いた声を示して、こうした願いがビジョンになったということが見えるようにした方がいい。もちろん、聴取した意見の全てが反映されているかどうかは別であるが、こういう意見の中で出てきたということは示すべきだろう。ただし、何をどこまで骨子に入れるかどうかは行政判断もあるかと思うので、お任せする。

**【委員】**

最終案に向けてはA3横一枚くらい。第1章から第3章の要点をまとめていく中で、つながり、意見の反映を含めてまとめると、意見に対する答えが見えるかと思う。

**【事務局】**

堅くてしんどい、遊びがないという話で、ここに表現しきれていない部分がある。阪神間では、若者たちをはじめ皆が様々な元気なことをしている。面白いエリアで楽しいところだという「ワクワク」、「楽しい」、「面白い」という表現で記載していいか、見え方について何かご意見があればお願いしたい。

**【委員】**

「やらなければいけない」ではなく、「どこまで実現できるかわからないがやりたい」、「やった方がいいよね」、「誰か一緒にしませんか」というニュアンスは聞くが、ビジョン委員長の実感としてどうか。楽しいだけではいけないのではないか。それをどう原動力にするのかを考えるのが我々を役割であると感じている。

**【委員】**

ビジョンは県民のためのものだという言い方をされているが、こんなに難しい内容が阪神地域の多くの人に受け入れられるだろうか。教育もあった方がいいし、もっと分かりやすいレベルにして、もっとやわらかく、もっと皆さんのそばにある、皆さんで作っていきましょうよと問いかける、誘いかけるビジョンで、皆この指とまれという状態にするような文言で書かないと理解されないと思う。

**【委員】**

後半を進めていく。阪神ビジョン実現にむけたシナリオについて説明いただく。

**【委員】**

今日の議題のメインは骨子案を固めたいということ。次回以降、具体のシナリオに入っていく。今回、大きな方針を決めた方が議論しやすいと思うのでご意見いただきたい。

今回のビジョンは戦略的にいきたい。2050年のことを言われても分からないところがあって、どうしていくかというところでいろんなジレンマをかかえながら進めてきた。計画として、このシナリオの中間像を達成できたら、次のこの展開を見込めるということがある。シナリオごとに中間像を書いている。これが一つのシナリオでいくつか絞れて、いくつかの中間層が実現すると、まとめることができるかもしれない。事業を進める上でクリティカルパス（重大な経路）を考えるが、「ここをやらないと進まない」などがシナリオの中で見えたらいいと思う。戦略的な分かりやすい50年後を考えるより、まずここを目指しましょうというのが見えたらいい。

### 【委員】

大きく考えたときに、いろんなシナリオが想定されることが今日の未来ミーティングの話聞いて実感した。2050年の大きな可能性として共通で感じているのは、テクノロジーの大きな進化によって、私たちの暮らしが大きく変わっていくだろうということだと思う。「暮らしが良くなる」要素と、「大学、若者が沢山いる」この阪神地域、さらに「歴史文化も豊か」である。この3つをつなぐことによって、いろんな人たちが主体的に活動できる、地域コミュニティを新しく実現していくことができるのではないかと。それが実現することができれば大変豊かな、まさに住みたくなるまち、ワクワクするまちが生まれるのではないかと。いろんなシナリオがある中でいくつかのシナリオを選んで考えると、そういう未来像、もしくはステップアップのシナリオが見えてくるのではないかと感じている。

### 【委員】

シナリオは1ページでまとまらない。これができたらIT、インフラ、サロンなどのコミュニティができたらいいというものもあるかもしれない。

### 【委員】

例えば、経営者だと思って③を見たら、新卒の若者が「御社で働きたい」と言って「リモートワークさせてください」、「ダブルワークさせてほしい」、「残業したくない」、「成長させてください」、「働きやすい雰囲気でもキャリアを実現させてください」と言われたら、どういう感情が生まれるか。「あなたに何ができるのか」となる。皆さんは、優秀なのでリモートもできるし、ダブルワークもできるだろうし、残業も少なくともできるだろうと思うが、選ばれるために、「ダブルワークができます」、「リモートができます」と示すことが重要であるとガイドラインで示すことが非常に重要だと思う。「メンバーシップ型」から「ジョブ型」に変わった時にコントロールができない、またはマネジメントができないということになり、給与のテーブルが上がるのが難しくなる。「ジョブ型」で次に上がれなくなった時の補足として、大学との連携や学び直しも非常に重要であると感じている。企業側に選ばれるのにはこういうものがあつた方がいいと働く側も理解して、自分の価値を高める方法について行政として対策があつた方がいい。

「⑦求人」は、スタートアップやベンチャーの求人が阪神間で見つけづらい。私の会社は20名程度であるが、宝塚市に居住しているのは私だけであり、宝塚市の会社で宝塚市の人を採用しようと思ってスタートアップしていない。能力が高い人とダブルワークしながらでも、コ・クリエーションしていこうと思っているからリモートでの勤務を全国的に募集していて、地域内から雇用を創出しようという気持ちがないことを理解した方がいい。しかし、コ・クリエーションしていく時に、全てリモートではできないので集まる日を作りましょう。もしくは、あつた方が効率いいということで、「会うことのメリット」と「リモートのメリット」をどう判断して、住みやすさを考えた方がいいと思う。実際に京都在住の従業員は宝塚に、大阪在住の従業員は甲子園に引っ越ししてきた。

**【委員】**

完全に実力主義である。できないのであれば、さようならの社会にならないよう注意しないといけない。オンライン上とバーチャルとリアルのコミュニティがどうなるか試すことができればいいが、どこにも答えはない。

**【委員】**

資料3のシナリオは、第4章の(3)に入るが、どういう位置付けになっていくのか。

未来ミーティングや多様な主体にヒアリングし、プロセスを大切に、シナリオの中に意見を盛り込んで作り上げていることは理解するが、このシナリオに書かれているのは、「例えば」の話なのか、それとも「本当に実現していく」内容なのか、どう考えたらいいか。

将来こんな感じの世の中を目指しましょうというのは非常に大切なことなので、書いてあったらいいと思うが、「中間像への取組」の内容に濃淡があり、具体的な話もある。全部実現していこうと思っている内容なのか、その場合は誰がするのか主体の話や方法など、クリアしていかなければいけないことがあると思う。本当に具体化するという意味合いでここに記載するのか、今のところ出たシナリオが100個あって、やれるところからやっていくのか、どういう見せ方にするのか気になった。

**【委員】**

「将来像」というのはもう少しかみ砕いて目指すべき姿で、沢山あって目指していきましょうというもの。それに向けて「中間像への取組」は「例えば」と理解している。やってくださいということになるとビジョンはお仕事になる。取り組みをみんなで考えましょうかということから実際に始まるのではないか。

**【委員】**

中間像は示すが中間像への取組は例であり、ここはもう沢山あったほうがいい。イメージを膨らませるということをつかむようにしていただきたい。ぱっと見た時に戸惑う。

**【事務局】**

「これをしなくてはならない」ではない。コ・クリエーションなまちの実現で4つ柱が書いてある。これだけだとイメージが湧きにくい部分がある。例示になってくるが、「例えば」こんなことを作りたいと考え、そこで「例えば」こんなことをしていきましょう、行政もしていきましょう、のような、そういう縛りは沢山あって、阪神地域全体のビジョンは阪神地域でこんなふうになると分かるようにしたい。イメージの具体化の例として整理した結果、実際にはシナリオ1個につきA4で1枚、後ろに参考資料がついてくるイメージでいる。今は沢山いただいた意見を並べただけで、整理の仕方を考えないといけない。特に阪神地域を象徴する未来を主要なシナリオとし、他にも暮らしなどを反映するサブシナリオがあり、どこかに私の暮らしがあるという、阪神全体を象徴するようなシナリオがいくつかあるような構成かと私の個人的なイメージとして持っている。

【委員】

趣旨は理解したが、字が多く読みにくい。「楽しい」、「興味そそられる」、「やってみたい」と思わせるような表現にして見せ方も検討したほうがいい。

【委員】

例えばメイン事業をだして、阪神南にある「尼崎の森」のような、みんなで一緒にしやすいものをおいて、一緒にやってみたら何かにつながるのではないかという方法もある。シナリオの中で核となってこれやったらこう派生していくという考え方もある。とらえ方も今後議論を深めていけたらと思う。

【委員】

資料3の位置付けや性格について戸惑っていたが、とりあえず意見を流し込んだと聞いて安心している。未来ミーティングの意見でも一生活者としての実感は述べられているが、客観的なデータが含まれていない。比して将来構想試案（参考資料1）はそれぞれ対応するデータが示されているので、一定の根拠に基づいている。こうしたこともあり、資料3を一つ一つ精査していくと大変なことだと思っていた。加えて、意見の中には基本的人権の保障の観点から差し障りがあるのではないかと懸念される内容も含まれている。出されている意見の精査を誰がするのか。また、現実離れしてありえないような話を書いてもいけないと思うが、長期的に見て、頑張ったら実現できるよねというところは書きたい。こうした実現可能性についてもどこまで見るべきなのか戸惑いを持った。

なお、資料3の自分らしいスタイルが実現できるまちのシナリオテーマは、例えば「①仕事と生活」、「③多様な働き方」、「④ゆとりのある暮らし」、「⑧充実した暮らし」、「⑨夢のある暮らし」で同じようなこと言っている部分がある。具体的には、「①仕事と生活」はワークライフの調和じゃなくてワークワークの調和の話、つまり「仕事と仕事」の話になっているので、項目が渋滞している感じが高まっている。細かくシナリオを作ろうとしているが、ある程度はまとめた方がよい。

【委員】

調整の仕方としてレベルを合わせるということもある。また、基本的人権の問題もあるが、他者を許容しないと始まらない。出た意見がそのまま入っているのをまとめていく作業について、まず事務局で整理し、たたき台を作る。たたくのを3～4人の少人数で色んな意見を出し、時間内で議論するやり方もある。まとめ方については、全県ビジョンのシナリオがでて色んな項目で整理されているが、関連性は整理されておらず、全てつながっている。整理してしまうとつながりがなく難しい。全県ではふわっとしていた方が後々やりやすいという判断であるが、地域ビジョンではどうしたらよいか考えていきたい。本日、言い足りないことは事務局にお知らせいただき、次回は自治体委員の方にも入っていただきたい。